

アークフラッシュ施工された老人施設 6年間インフルエンザの発症が報告されておりません。

< ** > <http://www.arc-flash.co.jp> **新着施工写真を更新いたしました**

< 施工報告 >



城ヶ島京急ホテル(エコリーディング)

< 施工受注 >

* 新潟県十日町給食センター(アークメディカル)

* パチンコ業界最大手のマルハンの外壁を大阪地方の店舗を使用して3社にてコンペをしておりました結果が出ました。めでたくアークフラッシュが採用されました。施工後3月で差が出てしまい、コンペの期間の6ヶ月を大きく前倒して決定いたしました。施工に際してトラストリホームの加藤社長始め社員の方に大きなご協力を頂きました。ここにお礼を申し上げます。アークフラッシュ施工に初めてブランク使用による足場無しの施工を実施いたしました。又、マルハン様からは、店舗内部の施工と立体駐車場の施工の仕事を頂きました。(J-TOC 受注)

< 海外でも問題発生 >

入院中の患者が院内感染で死亡した場合、病院側に75%程度の責任があるとの判決が出た。

ソウル高裁民事9部は5日、高血圧で入院し、敗血症による心筋梗塞で死亡したパク某(当時48歳)さんの遺族が病院と担当医を相手取って起こした損害賠償請求訴訟で、病院の責任を60%とした原審を変更し、病院の責任を75%と認め、約9500万ウォンの支払いを命じた。

< 日本国内の感染情報 >

板柳町の板柳保育所(竹谷光子所長)で、全園児百五人中、半数以上の五十四人と職員二人が十二日から嘔吐(おうと)や下痢などの症状を訴えていたことが十六日、分か

った。弘前保健所の調査で、嘔吐物や検便からノロウイルスが検出されており、引き続き、感染源や感染経路を調べている。

町役場によると、十二日午後までに園児十八人が体の異常を訴え、十三日の時点で五十四人にまで増えた。職員は十四日に発症した。

受診などで子供たちの容体は回復しているが、十六日現在で十数人が休んでいるという。入院患者はいない。

町は十五日付で経過をホームページで公開しており、感染源や感染経路が判明し次第、保護者に説明する方針。県保健衛生課は「ノロウイルスの食中毒と感染性胃腸炎の両面から調査中」と話している。

子供が発症したという保護者の女性は「詳しい説明や原因をはっきりと知りたい。今後の対策を講じないと不安」と話している。

県内のノロウイルス食中毒として、今年、居酒屋や国民宿舎など三件の発生を県が発表している。また胃腸炎は、子供や高齢者に集団発生する場合があります。二〇〇三年に青森市内の小学校で百数十人、〇四年に同市内の複数の老人施設では計約二百人が発症した。

<いよいよインフルエンザの季節です>

内モンゴル自治区包頭(パオトウ)市人民政府は2日、同市九原区で発生した鳥インフルエンザの感染拡大は阻止されていると発表した。ただし北京市は9月30日から、同地区から生きた家禽類や加工品の持ち込みを禁止、更に他省から家禽類のひなの持ち込みを禁止するなど、警戒を続けている。

九原区では9月20日、家禽類の売買をしていた業者が、他の地域から搬入した烏鶏(うけい)のうち70羽あまりが死んでいるのを発見。当初は輸送による圧死と考えていたが、数日にわたり烏鶏の異常死が続いたため、27日朝になり、状況を当局に報告した。

サンプルを受け取った内モンゴル自治区動物疫病予防コントロールセンターと国家鳥インフルエンザ参考実験室が検査したところ、烏鶏は高病原性のH5N1鳥インフルエンザウイルスに感染していたことが判明した。

このため、包頭市九原区は該当地区を封鎖し、家禽類2.5万羽を殺処分。更に、10月2日からは農業部が緊急調達したワクチンの接種を開始した。接種作業は10日以内に完了する予定だ。

包頭市人民政府は2日午前記者会見を開き、2日午前0時の時点で、鳥インフルエンザの新たな感染は確認されておらず、人への感染も発生していないと発表した。

一方、北京市は9月30日に包頭市九原地区からの鳥インフルエンザ発生地域からの家禽類や加工品の持ち込みを禁止。他省からの家禽類のひなの持ち込みも禁止した。また、内モンゴル自治区、河北省、山西省から運ばれてくる家禽類及び加工品を重点検査対象とした。

新京報によると、10月3日の時点で北京市は包頭市九原地区からの家禽類等の持ち込み禁止措置を継続している

<シックハウス情報>

住宅の建材に使われた化学物質が原因と見られる頭痛、めまい、けん怠感などのシックハウス症候群に悩む人たちの症状改善に役立てようと、千葉大と民間企業との共同事業「ケミレスタウン・プロジェクト」の起工式が21日、柏市内の千葉大環境健康ワールド科学センターで行われた。化学物質をできるだけ使わない住宅を今年度中に建設し、子供の患者に短期間滞在してもらい、症状の改善に役立てる。

ケミレスはケミカル(化学物質)とレス(少ない)を意味する造語。プロジェクトには千葉大と三井不動産、積水ハウスなど民間企業22社が参加。同センターの一画に、民間会社が化学物質をできるだけ使わない住宅を6棟建設する。07年度に開設する環境医学診療科が入るテーマ棟に、学校、図書館のモデルとなる施設も併設する。08年度をめどにシックハウスを疑われる子供の患者と家族に、住宅に短期間住んでもらい、症状が改善するかどうかをみる。症状に及ぼす住環境の影響を評価・研究し、快適な住環境の指針を提案することを目指している。

起工式で、千葉大の古在豊樹学長は「このプロジェクトは研究だけでなく、広く社会に受け入れられて、街の環境を改善していく。成果を世界に発信することを願っている」とあいさつした。環境ホルモン(内分泌かく乱物質)の研究で知られる森千里・千葉大大学院教授は「研究成果が出て、小学校や公共施設などに化学物質を抑えた建物が広がることを期待している」と話している

* 発行責任者:株式会社アークフラッシュ本部

笹川 透

03-5337-7275 FAX 5337-7465 honbu@arc-flash.com

1号～53号までを配信希望の方はメールにて申してください。